

【4】 取り組みの構想

1年次、2年次の経過を踏まえた今年度の研究の取り組みについて、以下にその概略を述べる。

[1] 小学部の子どもたちの楽しみ方の実態、めざしたい姿、教師の願い

○子どもたちの実態

- ・楽しむための技能が十分でない
- ・自分なりに楽しめているが、楽しみが拡がりにくい
- ・みんなで楽しめない

○めざしたい姿

- ・友だちと関わって遊ぶ
- ・幅広くいろいろなことに興味をもって取り組む
- ・することを見つけ、自主的に行動する

○教師の願い

- ・楽しみ（楽しむ力）を育てたい
- ・楽しみを教えたい（拡げたい）
- ・楽しみをみんなの中で育てたい

～姿勢として～

- ・個性や特技が十分に発揮できるように
- ・その子なりの楽しみ方を大切に

[2] 小学部の子どもたちにとって「楽しむ」とは

- ・楽しむことは行動の原動力である
- ・楽しむことで没頭できる
- ・楽しんで活動するなかで力をつけることができる

①「楽しむ」具体的な姿

（いきいきと活動する姿）

集中する、分かる・できる、共感する
自己決定する、本人参加している、充実感や達成感をもつ、積極的に取り組む、やる気に溢れている、没頭する、成功感をもつ、情緒が安定している、自分の力を発揮して取り組む、心を弾ませている、にこにこした笑顔が見られる、目の輝きや豊かな表情がある、場から離れない、活動が継続している

②「楽しむ」ために育てたい力

（楽しむことで育つ力）

好奇心、集中力、自己決定・自己解決する力、感じ取る心、コミュニケーション能力、認知能力、言語理解力、表現力、社会性、持続力、自制心、基本的な生活習慣、基礎的知識、基礎体力、運動能力

①も②も楽しい活動の中で育つ。

①と②は車の両輪のように、絶えず連動し合うなかで、社会的自立の力を獲得していきけるものとする。①の姿を求めていくことで②の力が育ち、②の力が育てば①の姿により近づいていける。私たちは①、②の両方を大切にしながら、本研究を進めていく。

[3] 本テーマにおける小学部の立場

小学部は「生活を楽しむ力」の素地をつくっていく段階であると考え。つまり、

- ・今を充実させ、「心から楽しむ」経験をたくさん積み重ねる段階
- ・得意なことや興味をもっていることを見つけ、“これなら自信がある” “楽しめる” というお気に入りのをしっかり作り育てていく段階
- ・楽しみを拡げ、増やしていく段階

○基本的な方針



- ・自分らしく、その子が持っている力で今をよりよく生きることを大切にする。
- ・主体的に意欲をもって活動する（心から楽しむ）経験をたくさん用意する。
- ・「生活を楽しむ力」（生きる力）の基礎的・基本的内容をていねいに指導する。



興味を持ちながら、いきいきと活動する子



将来の「生活を楽しむ」姿へ

[4] 授業づくりの視点

「興味を持ちながら、いきいきと活動する子」をめざすために、子どもたち一人ひとりの発達、障害、個性について十分把握した上で、授業づくりでは、次の3つの視点に着目した。

- ①自己活動 — 子どもたちが進んで活動することを大切にする。
- ②思考の過程 — 自分で考えたり、選択したり、決定したりする過程を大切にする。
- ③達成感・成就感 — 充実した活動の後の達成感・充実感が得られるようにする。

[5] 小学部の自己活動、思考の過程、支援についての考え方

「自己活動」とは本来、自ら進んで活動することであり、「思考の過程」とは、自分なりの考え方を思いめぐらすことである。しかし、生活経験の少ない小学部の子どもたちは初めから全てを投げ出された条件の下で自分の考えで選択したり、自分の意思で行動したりするための力が十分に育っているとは言えない。どの子も、それなりに自分の考えや思いをもってはいるが、それを十分に発揮して活動していくためには、周りからの多くの支援が必要である。また、小学部の段階では、様々な抵抗に出会い、思考の過程をくぐりぬけるにしても、最終的には「成功する体験」につながるものにしたい。なぜなら、その方が、その子にとって自信や満足感につながり、肯定的な自己を発見し、主体的に生活する力につながると考えるからである。いずれにしても、子どもたち個々の生活年齢や発達段階、個性、課題等を十分考慮して取り組まねばならない。

○小学部の考える支援

- ・思考の過程を通った自己活動を展開し、いきいきと活動するための支援

(興味をそそる教材や働きかけ、最近接領域での教材づくり、見通しの与え方、やる気を起こす言葉かけや示範、ほめ方、自己選択の動機づけ等)

- ・生きる力を育てる支援

(つまずいても乗り越えられる抵抗、今必要な体験)

- ・達成感や満足感、自信につながっていく支援

(できる状況づくり、やりとげた満足感につながるもの、成功に終わる展開)

○2つの支援

PLANの段階の支援 — 主に題材の選定やそれに寄せる教師の意図など

DOの段階の支援 — 子どもたちがいきいきと取り組み、成功感を持つための方策

○支援の内容

	自己活動のために	思考の過程のために	
PLANの支援	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思いや興味関心をくみとる ・発達段階を考慮して無理がない ・経験したこととつながりがある ・見通しが立ちやすい ・教師と児童との間に共感がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考え、決定し、実行できる ・自由さがある ・経験や楽しみが広げられる ・乗り越えられる抵抗がある 	<p>⇒</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>達成感・成就感へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成功の喜び ・目標がかなう ・満足感喜び ・自己有能感 </div> <p>↑</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・客観的な評価 ・教師との共感 </div>
DOの支援	<ul style="list-style-type: none"> ・場の設定・具体物使用 ・わかりやすい発問 ・声かけ・繰り返し ・励まし・好きな教材 ・教師の共感・ほめる ・得意な活動・自己選択の場・落ちついた環境 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由さを与える ・選択肢を用意する ・ゆさぶりを与える ・乗り越えられる抵抗を用意する ・その子なりの思いや工夫を生かす 	

その他にも、教師と子どもたちとの距離、教師の位置、声かけの内容やタイミング、教師の目線や表情、手のさしのべ方等々、多くのことに配慮しながら支援していくことが大切である。

【6】 生活単元学習を授業づくりの中心に

私たちは、次の4つの理由から、生活単元学習を授業づくりの中心にすえて取り組む。

① 「豊かに生きる力」を育てることをめざしている指導の形態である

生活単元学習そのものが、「今の生活にやる気をもって、いきいきと、楽しく、心はず

ませて、主体的に取り組み、やりとげた充実感を次の生活につないでいく」そういう豊かな生活を積み重ねることを大切にしたい学習であり、そのことは将来を豊かに生きる力を育てることにつながる。

② 内発的な動機を大切にし、子どもの発達上の基本的欲求を満たす指導の形態である

生活単元学習は、「やりたい、やらねば」という生活に根ざした意欲・関心の高まりを大切にする。子どもたちの心を大切にしたい主体的な学習であってこそ、発達は期待できるはずである。また、生活単元学習は、子どもたちが発達段階に応じて持っている基本的欲求を満たす活動（感覚遊びや探索行動、ごっこやみたく・つもり活動、遊び的労働等）を生活年齢に応じた形で入れ込むことができる。

③ 問題解決的な学習過程を大切にしている

生活単元学習では、必要感や目的意識に基づいた取り組みをするため、「自己活動」や「思考の過程の重視」、「達成感・成就感」といった、研究で大切にしているポイントを無理なくくぐらせることができる。

④ 知的な遅れをもつ児童・生徒の実態に対応しやすい

<児童・生徒の特性>	<メリット>
・学習したことの活用が難しい	——— 具体的な生活を通して、生活に役立つ知識・技能が習得できる。
・自信がなく、自主性、積極性に欠けやすい	——— 強い興味や必要感によって取り組む。彼らなりの力でできる課題が用意できる。成就感、自己有能感がもてる。
・個に応じた指導及び、集団活動が必要	——— 一つの目標に向かって個に応じた学習が準備できる。助け合ったり、協力したりする活動が多く含まれる。

[7] 授業をミクロな視点で見つめて反省し、教師の意識改革を

「教育は教師なり」の言葉どおり、教師の言動そのものが授業を大きく左右する。時には一つの授業をミクロな視点で見ながら反省し、教師自身の意識を変えていかねば、なかなか成果は上がらない。そこで、授業をビデオに撮り、それを分析し反省する機会を大切にする。教師は大人の文化や考え方を子どもに伝授しようとしたり、無理にそれを指導しようとして、子どもを心ないがしろにしてはいないかという視点に立ち、授業を見直してみることにする。授業分析では、研究のテーマに即して、児童の自己活動、思考の過程は大切にされたか、真に子どもの思いに寄り添う支援はできたか、できる状況づくりはどうであったか、達成感・成就感を満たす授業であったのか等を話し合う。ビデオ分析を通して授業を多角的に見ていくことで、教師の意識や姿勢を少しでも反省・変革し、次の実践に生かすようにする。

(小坂祥子)